

【表-1】 Beethoven Symphony No 9, 4th mov. 冒頭 Recitativo の Beethoven 本人作 の歌詞(主張)

注) ベートーヴェンの書き残した冒頭 Rec.用の歌詞の下記原文(独語)には不鮮明な箇所が多い。しかもその歌詞を載せた文献は2種あり(ノッテボーム版とダイタース版)、それらの間には多少の差異がある故、箇所によっては文献2種を併記し、あるいはカッコで加えた。以後の歌詞は、すべて4楽章作曲前に、彼が試行錯誤していた際スケッチ帳に書き込んだもので、最終的にこの交響曲に歌を加えるという大英断を下した際、冒頭のVcとCb用に書き込んだ主張は、バリトン独唱に極めて速いテンポのまま直接厳しく主張させることにし、その主張が成就した暁に歓喜を得られるという仕組みにより4楽章を完結させた。その大改訂の際、冒頭のチェロとバスのRec.の旋律にも大幅にメスを入れたため、これらの歌詞(主張)は、下記の改定後(現行)の旋律に合わせて彼が直接書き込んだものではない。しかしその主旨や歌詞(主張)の適用順、用途は全て同じであるが故、これらをイメージして改良されたことは明らかである。故にこれを知らずして、強烈に速いテンポ指示等、彼の真意を表現することは不可能と言えよう。

Presto $\text{♩} = 66$ **怒りと絶望による猛烈に速い緊迫のレシタティーヴォ!** 日本語訳は内藤彰による

① **ダメだー! この音は我れ我れに- ぜつぼうをおもい一出させる**
 Nein diese (Töne) (würde uns) erinnern an unsre Verzweiflung (voll) stand.

● “この音”; 冒頭(8小節間)の、(絶望の)ファンファーレのこと(後にバリトン独唱により diese Töne と歌われる)

① ベートーヴェンはその当時、フランス革命で失脚したはずの特権階級層の復権や、近隣諸国で頻発する数々の戦争等、彼が絶望的と感じた当時の政治の流れを、4楽章冒頭の、敢えて憎々しく汚い音で書かれた(ベートーヴェン談)ファンファーレの音に例え、憎々しい“この(絶望的音)”と称して、次(9小節~)からのチェロとコントラバスのレシタティーヴォ(以後 Rec.)に“絶望”の言葉を用い(上記楽譜)、怒りを持って極めて速いテンポで演奏させることにより上記絶望的政治の流れを強烈に拒絶した! (ベートーヴェン自身が $\text{♩} = 66$ という極めて速いテンポを楽譜に指定し、そのテンポを絶対を守るようにとの注意書きを、初演後総譜の初版第2稿に仏語で書き加えた)

“この音”は、後にバリトン独唱が初めて登場する“*Oh Freunde nicht diese Töne*; お~友よ! この(絶望的政治情勢を表す汚い音)ではない”においても、直前に4楽章冒頭の(絶望の)ファンファーレを再現(209小節~)させ、続いてほぼ同じ形の Rec.に、今度は初めて上記歌詞を与え、冒頭と同じく絶望的政治の流れを直接ドイツ語により厳しく拒絶させている。

彼は、このバリトン独唱で命令調に歌われる厳しいメッセージに強烈な印象を与えるためか、当初年月をかけて周到に用意してきた4楽章冒頭部の最重要の歌詞(主張)の一部を、後の主部で歌われるバリトン独唱に任せ、冒頭部に直接用意した言葉は最終的にすべて削除し、オーケストラ演奏だけでその主張を物語る当時流行していた器楽レシタティーヴォ形式を選択した。

当然バリトン独唱も、絶望的政治の流れを強烈に拒絶するため、極めて速く厳しいテンポ $\text{♩} = 66$ で歌うよう意図されている。今まで、この事実を知らない大半の独唱者と指揮者によって、このバリトン独唱は、本来の絶望(拒絶)!とは全く無縁で無意味なゆったりとしたテンポで、美声をひけらかすように朗々と歌われてきた。

これは「第九」にとって最重要な本質を無視した、とんでもなく大きな過ちであることを知らないまま!

② せっかくのフランス革命勝利(1799年)も、その後の古い特権階級の復権や、相変わらずの数多い戦争等、当時彼を苛立たせていた多くの政治的事象 ⇒ この音(絶望を思い起こさせる汚い音) ⇒ 強烈な速さと叫びによるそれらの完全否定! ⇒ 少しでもテンポが遅くなれば、この叫びの効力は失す(この叫びの効力が強ければ強いほど、それを拒絶することにより到達し得る最後の歓喜が爆発的となる)! ⇒ 故に絶対に遅くするな!!

次に全く同じファンファーレで 絶望の世 を表現し、それを拒絶した後、
 “今日は祝祭日(革命日)だ。歌い踊って自由への解放を祝おう!”

Presto $\text{♩} = 66$

② **友(も)よ 今日 は 祝(く) 祭(い)日歌(た)い 踊り いわー おう**
 Heute ist ein feierlicher Tag. Meine Freunde dieser sei gefeiert durch Gesang und Tanz

歌詞の背後にあるベートーヴェン、シラーに共通する政治思想との関係; 当時の革命は、いきなりテロ等の恐怖から始まった訳ではなく、祝祭として始まり、その中で自由に向けて歌っていた。よく知られたメロディを基に、毎日のように自由に寄せる歌が生まれていき、それは民衆の共有財産となり・・・ 注) Dieter Hildebrandt 著 “Die Neunte” より

ベートーヴェンは、人類が目指す理想郷(エリージウム)到達への必須要件として、前記2つの Rec.による当時の政治事象に対する厳しい拒絶に続き、理想郷到達への妨げとなる人間の生き様にも言及した。その例として、彼はそれまでにほぼ完成していた1~3楽章を利用し、それら3つの楽章の冒頭部数小節を順次提示した後、チェロとコントラバスに与えられた Rec.の歌詞(言葉)(下記・後に削除)と旋律により、ことごとく各楽章の有り様を拒絶してみせた。ただ、彼が忌み嫌っていた政治事象とは異なるこれら3つの楽章を、「第九」完成間近に敢えて否定材料として使用した理由は、交響曲の全楽章に統一感を与えることにあったと考えられる 注)ノッテボーム著「ベートーヴェニアーナ」。

すなわち独唱と合唱を4楽章のメインとして使用するという、当時の交響曲としては例を見ない、論争の基になるであろう形式を採用するにあたり、新しい形態の4楽章だけが1~3楽章と乖離することを防ぎ、全楽章に統一感を与えるために各楽章のさわりを4楽章に取り入れたのである(循環形式の交響曲の始祖)。こうして推敲に推敲を重ねて作られた新しい形式の第4楽章により、諸々の絶望的状況の拒絶完遂の暁に初めて理想郷へ到達するとする、4楽章形式の堂々たる交響曲が誕生した。

1 楽章冒頭部 8 小節後

1 楽章冒頭部が始まると、そうではなく、**喜びに繋がる快い音楽**(祝祭に相応しい歌と踊り?等)を求めていこう!

Tempo I (Presto) $\text{♩} = 66$

38 小節

ちがう - ! これじゃ な - いわし がほしい - の は なに - かべつ - の ころよいも の な の だ -
 O nein! dieses nicht, etwas anderes (gefälliges) ist es, (was) ich fordere ●快いもの; 平和で平等に繋がる祝祭の歌や踊り?

●音楽的には素晴らしい楽章だが、scherzo の文字通り意味するような
 軽々しい浮かれた世ではなく、少しでも明るく希望溢れるより良き世の中を願う!

2 楽章冒頭部 8 小節後

Tempo I (Presto) $\text{♩} = 66$

56 小節

(これも)ダメだ た わむ れるな も - っ と 明か るく うつく しき 良き 世 - dim. を
 Auch dieses nicht, (das ist) nur Possen, (sondern nur) etwas heiter, etwas schöners und bessers

3 楽章冒頭部 2 小節後

死の半年前(1826年9月末)、この曲をウィルヘルム3世へ献呈するため新たに写譜された総譜に、ベートーヴェン自身が最後の修正を施した。その際、Tempo I (Presto)を消し Allegro、すなわちやや遅めのテンポに直した。

Tempo I Allegro

65 小節

あ - 優さし すぎる も - っ と 活気 あるうたもと めん我れ示さ-ん唱-和せよ!
 Auch dieses (nicht), es ist zu zärt(lich), etwas (aufgewecktes?) muss man suchen. Ich werde sehn dass ich selbst euch etwas vorsinge als-dann stimmt nur nach.

4 楽章冒頭 4 小節後

Allegro assai ($\text{♩} = 80$) Tempo I (Allegro)

81 小節

あ! これ なり やっ と 見 つけたよ ろ こ - び - を-(わたしが みずからう -
 Ha! Dieses ist es Es ist nun ge-funden.Freu - de (Ich selbst

た-い しめ - さ ん)
 werde vor - - singen)